



ドストエフスキイ、青春の肖像画

[K.A.トルトーフスキイ画、1847年]

今回紹介するのは、ドストエフスキイ26歳の頃の鉛筆で描かれた肖像画です（K.A.トルトーフスキイ画、1847年）。今まで紹介したものは、ドストエフスキイが59歳の時に撮影された最後の肖像写真（パノーフ撮影、1880）、そして51歳の時に描かれた肖像画（ペローフ画、1872年）二つですが、これらが共に表現する重厚で深遠な思索家ドストエフスキイ像とは異なり、この肖像画が表わすのは何よりもまず青春の真只中にある瑞々しい、そして繊細この上ないドストエフスキイと言ってよいでしょう。この肖像画を描いたK.A.トルトーフスキイ自身が美術専門学校の生徒であるということも、この肖像画に青春の輝きを一層加えているのかも知れません。

この肖像画を私は二十年近く部屋の壁に貼っていたのですが、ドストエフスキイ後期の深刻な作品群との取り組みの中で、しばしばこの若いドストエフスキイを眺めては、如何なる「闇」の中にも存在する「光」を忘れてはいけないことを思い起こさせられたのでした。『貧しき人々』（1845）から『カラマーゾフの兄弟』（1880）に至るまで、人間

と世界とその歴史について、次々と重い暗いテーマが取り上げられるドストエフスキイ文学の底流には、このような新鮮で瑞々しい生命感が脈々と流れていることを、このドストエフスキイは私に訴えているように感じたのでした。私のカラマーゾフ論の背を押してくれたものの一つが、この肖像画です。

青春の瑞々しさということを強調しました。しかしこの肖像画の中には、ただ甘美な青春のみが存在するわけではありません。両眼から鼻筋を経て、真一文字にキチッと結ばれた唇にかけて、ここに表現されているのは人間と世界とその歴史を正面から見据え、そこにある闇と光の一切を胡麻化さずに受け止めようとの強い意志であるように思われます。その強い意志そのものが、青春の瑞々しさでもあり、このような若きドストエフスキイの見事な肖像画を描いてくれたトルトーフスキイに感謝しなければと思います。

ところで1847年頃のドストエフスキイは、二年前に発表した処女作『貧しき人々』の大成功の後、続いて発表した『分身』や『プロハルチン氏』、そして『ペテルブルク年代記』や『主婦』などが世に受け入れられず、彼を絶賛してくれた評論家ベリンスキーとの間にも隙間風が吹き、彼自らも癲癇発作に悩まされ、決して幸福とばかりは言えない日々の中にいたのでした。やがて彼が政治犯として逮捕される原因となるペトラシェーフスキイ会に参加し始めるのもこの頃です。青春の瑞々しい輝きの中には、それに劣らぬ暗い影が忍び寄ってもいたのです。

しかし結局のところ、この肖像画が表わすのは、繰り返しとなりますが、青春が持つ生命の瑞々しい輝きと繊細さ、そして人生に向かう不屈さと凜々しさであり、ここに描かれたドストエフスキイが訴えるのは、人生の暗い森の奥深くに迷い込んでも、我々は青春の瑞々しい輝き、そして不屈さと凜々しさを決して忘れてはならないということでしょう。